

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

| | |
|------------|---|
| Title | 東欧出身短期留学生の日本留学観に関する一考察 |
| Author(s) | 安, 龍洙 |
| Citation | 茨城大学全学教育機構論集. グローバル教育研究(1): 1-11 |
| Issue Date | 2018-02 |
| URL | http://hdl.handle.net/10109/13553 |
| Rights | |

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

東欧出身短期留学生の日本留学観に関する一考察

安 龍洙*

On the Attitudes That Short-Term Students from Eastern Europe Hold towards Study in Japan

Yong Su AN*

要旨

本稿では東欧出身短期留学生4名（ロシア人、キルギス人、ハンガリー人、ブルガリア人）を対象に1年間の日本留学を終えて帰国する直前にPAC分析法を用いて彼らの日本留学観を調べた。その結果、1) 日本留学については、日本の大学生は外国人に無関心だと感じている一方で、日本で知り合った留学生を通して日本以外の国にも興味を持つようになったこと、2) 日本人及び日本社会については、日本は安全で暮らしやすい環境で仕事を重視する社会であると考えていること、3) 留学生と日本人との交流については、外国人との交流に消極的だが、外国人に親切で困った時には助けてくれるという複雑な日本人像を有していること、がわかった。また、東欧出身留学生の共通の対日観としては、日本人の優しさ、日本のサービス、外国人に対する親切な態度に対してポジティブに評価していることがわかった。

【キーワード】 東欧出身留学生、日本留学観、PAC分析、異文化適応、対日観

1. はじめに

本研究は日本社会における「外国人」と「日本人」の異文化相互理解の実態とその特徴について認知的・情意的な観点から質的に検証し外国人と日本人の相互理解と相互交流の課題と問題点を検討する一連の研究の一部である。

本稿では、東欧出身留学生4名を対象にPAC分析法による調査を実施し彼らの日本留学観を探った。日本で学ぶ留学生の日本留学観については、奥村(2016)、安(2014, 2016)、安他(2014)、藤原他(2014)などでPAC分析法を用いて質的に分析している。

*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo, Mito-shi 310-8512 Japan)

奥村 (2016) は、在日外国人留学生を対象に PAC 分析法とマンスリー・レポートの内省記述の分析を行った結果、異文化適応過程が複眼的な視点を身につけ他者の受容と自己理解を伴う人間的成長には葛藤や苛立ちを感じつつも自立に向けてのステップとなっている、と述べている。

安 (2014) では韓国人短期留学生の日本留学観について、地震や原発事故に対して不安を感じながら留学生活をしていること、優しくて親切な日本人に対してプラスイメージを持っていること、「反韓感情」、地震・放射能などの対日イメージは、日本留学後にそのイメージが薄らいでいることなどを指摘している。安 (2016) のインドネシア人交換留学生の日本留学観では、海外での一人暮らしが楽しいと考えている一方で課題・宿題が大変であり、物価が高いことなどの留学観が表れた。また、日本人に対しては、規範意識は高いが本音を出さず消極的であるというイメージを有していることがわかった。

藤原他 (2014) では、工学系大学院留学生の日本生活に関する考察において、日本人との人間関係が最も多く表れ、特に研究室における他者との関係が留学生活観に影響を与えることが確認された。また、留学生が直面する問題については、研究室の習慣に対する意識、日常的に用いる言語(能力)、財政状況等により個別の特徴が表れた。内藤 (2004) は、日本で学ぶ外国人留学生の異文化適応問題について日本人との人間関係や日本文化の理解が不十分で馴染めないが、適応が進むにつれて積極的に取り組もうとする姿勢がみられると述べている。

これらの研究から、留学生の異文化体験においては、異文化と葛藤しながらも自分なりに留学生活を楽しむとともに、留学経験が自立に向けてのステップになり、留学前のネガティブな対日イメージが改善される傾向が示された。また、藤原他 (2014) で指摘しているように外国人留学生の留学生活には研究室など日常的に接する機会が多い身近な日本人や生活環境が彼らの日本留学観及び対日観に大きな影響を与える可能性が高いと考えられる。さらに、安他 (2014) はブルガリア人の日本留学前後の対日イメージの変化について調べ、日本で留学した地域とそこで知り合った日本人を通して形成されたと思われる対日イメージが比較的多く、複数の要因によって一つのイメージが形成されたとするケースが多いことが示された。また、約1年間の留学後には対日イメージが強くなったり理解が深まったりする場面があることがわかった。

日本人の海外経験者の留学観及び自国観について池田 (2014, 2015) は、日本人の海外留学に対する意識について、短期研修の経験者においては、長期留学への意欲が高まったと感じていること、勉強に対する姿勢、対人関係に対する意識や行動に変化が起きていると感じていることなどが示された。Naito (2014) は、海外滞在経験を持つ日本人の自国観の変化について調べ、海外在住経験が異文化理解の深化や日本の伝統の良さを再発見する質的変化が起きていることが示された。

本稿では、東欧出身の4名(ロシア人、キルギス人、ハンガリー人、ブルガリア人)を対象に約1年間の日本留学を終え、帰国する直前に PAC 分析法を用いて、彼らの「日本留学観」について調べた。本稿では、1) 日本留学について、2) 日本人及び日本社会について、3) 留学生と日本人との交流について、4) 東欧出身留学生の共通の対日観について、4名がどのように捉えているのかを中心に検討する。

2. 方法

調査は第1部と第2部に分けられるが、第1部は被調査者本人の同意を得てフェイスシートに被調査者の属性を記入させてから、質問紙を用いて以下のように調査を実施した。

まず、被調査者に以下の刺激語を与え、「①私が生活する日本の社会、②私と日本人がつきあうこと、③私の国の人と日本の人が分かり合うこと」を含めてイメージ項目が10項目以上になるように記入させた。

【刺激文】「あなたは『日本留学』についてどのようなイメージを持っていますか。思い浮かんだ言葉やイメージを、思い浮かんだ順に番号をつけて記入してください。言葉でも短い文でも構いません。」

その後、その連想イメージを重要と思われる順序に並べさせた。更にそれぞれのイメージ項目の組み合わせが、直感的イメージでその意味内容においてどの程度近いのかを7段階尺度で評定させた。この尺度での回答をもとに、ワード法でクラスター分析し、その結果に対する対象者自身の解釈を求めた。最後に連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は (+)、マイナスイメージの場合は (-)、どちらもいえない場合は (0) の記号を記入させた。

第2部は口頭により、1) 各クラスター及びクラスター全体の解釈、2) 上記1) の解釈についての来日前後の変化、3) 各イメージ項目に対して、そのイメージを抱くようになったきっかけや媒体、を尋ねた。

調査は2017年8月に実施したが、被調査者の誤用については正しい日本語に直し分析を行った。また、本稿では被調査者が特定されないように地名、国名、大学名、施設名などはすべてA、B、Cのように暗号化した。

3. 結果

ここでは、まずクラスター分析の結果を示し、その結果に対する被調査者自身の解釈を述べてから、総合的な考察を行う。

3.1. 被調査者 A

図1は被調査者Aのデンドログラムである。

クラスター1は、『5) 女の方は夏なのに肩や腕を見せない (0)』『8) 日本人は自分の気持ちを他人に見せない (0)』『4) 歩く時に日本人は他人を見ない (0)』『6) 女の方は冬なのに短いスカートをはく (0)』の4項目でクラスター名は「日本人の性格」とした。クラスター1について「日本人は恥ずかしがり屋で自分の気持ちを他人に見せようとしなない。例えば、発表の時に日本の女子学生が私から離れて発表を聞きながら友達と話していた。このようなことは言葉で言わなくても見ただけで何となくわかる。今は慣れているが初めのうちは『私と仲良くなりたくないのかな』と思って良くない印象を受けた。最初は本当に言いたいことを言わないが、色々話をすると本当に話したい内容に近づく。ある時、日本人は何も言わないから私が『駄目ですか』と聞いたら『駄目です』と答えた。また、男性も女性も他人の体に触らない」と解釈した。

クラスター2は、『9) 道が狭い (-)』『12) 授業中、学生が寝ても先生が何も言わない (-)』『13) 日本の大学は休みが多い (0)』の3項目でクラスター名は「日本の教育」とした。クラスター2について「日本人は小学校から高校まではよく頑張っていて勉強するが大学に入ったらあまり勉強しないから楽そうに見える。私の国と違うからびっくりした。A〈国名〉は大学に入るのも大変だが大

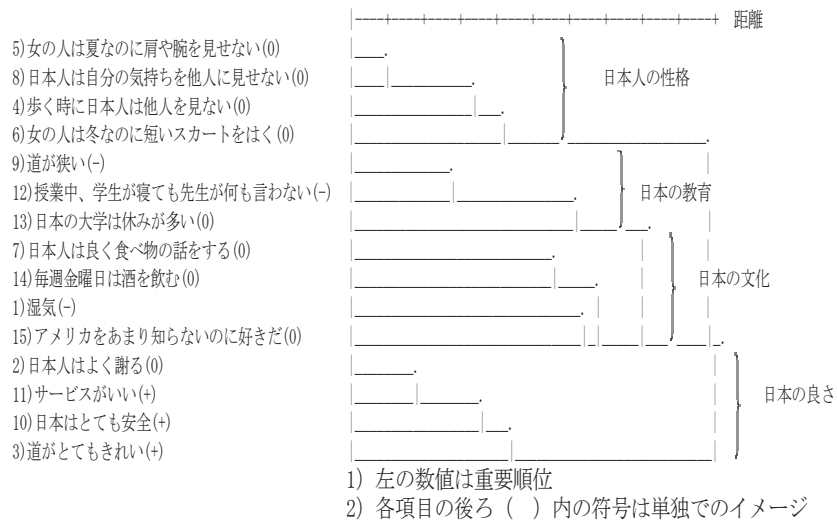


図1 被調査者Aのデンドログラム

学に入ってから大変だ。授業中に日本人学生が寝ているのに先生は何も言わないから、日本の先生は優しいと思った。A〈国名〉では学生が授業中に寝ていると叱られる。また、日本の大学は休みが多いのに日本人学生は『ああ、疲れた』『これはできない』とよく言う。中学と高校は分からないが、大学の先生は学生が間違っただけをしても指摘しない。A〈国名〉の大学の先生は厳しいと解釈した。

クラスター3は、『7) 日本人は良く食べ物の話をする(0)』『14) 毎週金曜日は酒を飲む(0)』『1) 湿気(-)』『15) アメリカをあまり知らないのに好きだ(0)』の4項目でクラスター名は「日本の文化」とした。クラスター3について「日本人はある集まりで、色々な国からの留学生がいるにもかかわらず、『アメリカ人、アメリカ人』と言いながらアメリカ人に嬉しそうに話し掛けていた。歴史的に原爆投下などがあってもかわからず、日本人はアメリカが好きなのはおかしいと思った。アメリカ人というよりアメリカが好きみたい。日本人は食文化に関心が強い。A〈国名〉では酒もたばこと同じように悪いイメージがあるが日本は違う。日本ではお酒が飲めないと大人として扱われたいし、酒が健康に悪いとはあまり思わないみたい。日本人は食べ物の話をよくするし、留学生にも留学生の国の食べ物に関する質問をよくする。例えば、『魚を食べますか、お肉を食べますか』のような質問をするが、どこでも肉と魚を食べているのに、何でそのようなことを聞くのかよく分からない」と解釈した。

クラスター4は、『2) 日本人はよく謝る(0)』『11) サービスがいい(+)』『10) 日本はとても安全(+)]『3) 道がとてもきれい(+)]の4項目でクラスター名は「日本の良さ」とした。クラスター4について「これはいいイメージだ。日本人は歩いている時にぶつかったら自分のせいでもないのに先に謝る。相手に謝られると自分も謝りたくなると思う。一人暮らしをしても安全だし、女性が一人でスーパーとかに行っても大丈夫だ。日本はゴミ箱があまりないが、他人が汚さないから自分も汚さないのかもしれない。A〈国名〉では、自分も街にゴミを捨てるのに、他人がゴミを捨てる文句を言う人がいる」と解釈した。

クラスター間の比較においては、いずれも関連性はないと回答した。全体については「日本はほかの国と違うと思う。例えば、日本人はよく謝ること、外国人に優しいことの習慣は特別に見える。日本以外の国の人の話を聞くと、私の国に似ているところが多いが日本は違う。特に日本人は、他

人にあまり近づかない、自分だけの生活を大切にする、他人と深く付き合わない、などの特徴がある。だから日本人と友達になるのは難しいと思う。しかし、東京の若者は目立つ服を着たり、オタクとかもいたりして特別な感じがする。日本人は地震に慣れているためか怖がらない。学校にいた時に地震が起きて、留学生は『地震だ』と騒いでいたが日本人は落ち着いていた。ニュースとインターネットで知ったことだが、日本人は働きすぎるし、仕事や会社を大切にする。日本人は日本の伝統文化や習慣をよく守る割には、先端技術が発達している。両方が共存するからすごくいいと思う」と解釈した。

3.2. 被調査者 B

図2は被調査者Bのデンドログラムである。

クラスター1は、『1) 丁寧 (+)』『2) いつも頑張っている (+)』『3) やさしい (+)』『4) 困ったらいつも助けてくれる (+)』『5) 気を利かせてくれる (+)』の5項目でクラスター名は「日本人の性格」とした。クラスター1について「この5つは日本人のいい点で日本人を通して経験したことだ。また、日本人から一番強い印象を受けたことだ。B〈国名〉人に比べたら、日本人はいつも頑張っているから私ももっと頑張ったほうがよかったと思う。店員の丁寧なサービスが印象深いが、日本以外の国に比べた時の日本の特徴だと思う。日本に来る前にも同じようなイメージを持っていたが、日本に来て実際に見てちょっと驚いた」と解釈した。

クラスター2は、『9) 交通費が高い (-)』『11) 自転車 (0)』『8) 町が静か (0)』の3項目でクラスター名は「日本での生活」とした。クラスター2について「E〈地域名〉は田舎で車より自転車に乗っている人が多い。田舎の割には東京より交通費が高いが、これは田舎町の特徴かなと思った。日本に来る前にもE〈地域名〉が小さい町だということは知っていたが、こんなに田舎だと思わなかったし、交通費がこんなに高いとも思わなかった。最初の半年くらいはバスを利用したので交通費が結構かかったが、今は自転車に乗っている」と解釈した。

クラスター3は、『6) 日本語は英語より難しい (0)』『7) 外国人と友達になりたがる日本人は多くない (-)』『10) 毎日米を食べる (0)』『12) 地震は何度経験しても怖い (-)』の4項目でクラスター名は「留学の苦勞」とした。クラスター3について「1年間日本に住んでもまだ日本語は難しいと感じる。G〈施設名〉のチューターは皆外国と外国人に関心があるが、G〈施設名〉以外の日本人は外国人に関心がない。例えば、大学の授業に出てもあまり外国人には関心がないように感

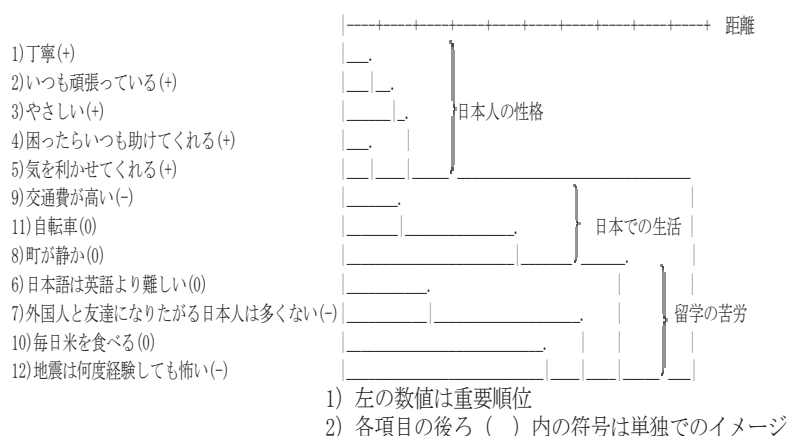


図2 被調査者Bのデンドログラム

じるし、先に話しかけてくることもあまりない。大学より大学以外の人の方が外国に関心があるように感じる。でも大学生は外国人に何を話したらいいのか分からないし、日本人はシャイな性格だから理解ができなくはない。日本に来る前はご飯はたまにしか食べなかったが、日本に来て毎日ご飯を食べるようになって私の食習慣も変わってしまった。最初は弁当を買って部屋で食べたがお金がかかるから、自炊をするようになった。米を5キロくらい買っておくと、1か月以上食べられるから安いと思う。地震は日本に来る前は経験がなかったから、何度経験してもやはり怖いし、慣れない。クラスター3は、日本に来る前もだいたい同じイメージを持っていた」と解釈した。

クラスター間の比較においては、クラスター1と3の関係について「私にとっては英語より日本語のほうが難しいが、日本人が私にもわかるような日本語で気を利かせて話してくれるから仲良くなれた。また、私も頑張って日本人を理解しようとしたから理解し合えるようになった」と解釈した。

全体については「遠いところから来ている外国人は、最初の半年くらいは大変だと思う。例えば、今も漢字は難しいが、最初は特に看板の漢字がわからなくて大変だった。私はこんなに長期間外国で暮らしたことも一人暮らしをしたこともなかったから大変だった。また、日本人に対してどう行動したらいいかわからなくて最初は戸惑った。日本の生活に慣れるのに苦労したが、いつも誰かが助けてくれたから留学生生活は大変ではなかった。色々な手続きは特に大変だったが日本人や他の留学生が助けてくれた」と解釈した。

3.3. 被調査者 C

図3は被調査者Cのデンドログラムである。

クラスター1は、『1) 色々な国からの友達ができた (+)』『3) 仲がいい (+)』『5) 楽しかった (+)』『11) 他国の文化に興味を持つ (+)』の4項目でクラスター名は「留学の成果」とした。クラスター1について「今までC〈国名〉人以外の人あまり知らなかったが、日本に来て色々な国の人と友達ができ、日本以外の国の言語や文化にも興味を持つようになった。帰国してからもラインで色々な国の人と連絡すると思う。日本だけでなく、アメリカ、タイ、オーストラリアなどについても学んだが、日本に来る前はこういうイメージはなかった。来る前は日本人との交流しかないと思ったが、G〈施設名〉で飲んだり食べたりしながら色々な国の人と交流をした」と解釈した。

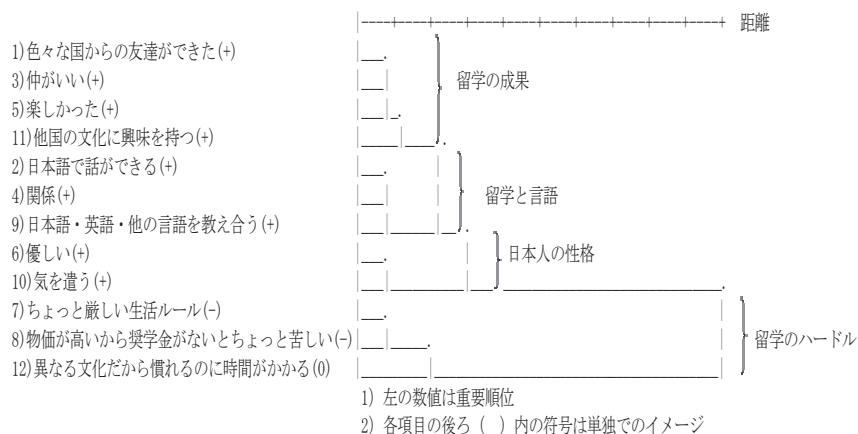


図3 被調査者Cのデンドログラム

クラスター2は、『2) 日本語で話ができる (+)』『4) 関係 (+)』『9) 日本語・英語・他の言語を教え合う (+)』の3項目でクラスター名は「留学と言語」とした。クラスター2について「日本に来る前は日本語以外の言葉は話す機会がないと思ったが、来日して色々な国の簡単な言葉を覚えた。G〈施設名〉でチューターは韓国語や中国語で話していたが、機会があれば私も韓国語を勉強したい。また、来日前は同じヨーロッパ出身の友達がE〈大学名〉大にいたと思わなかった」と解釈した。

クラスター3は、『6) 優しい (+)』『10) 気を遣う (+)』の2項目でクラスター名は「日本人の性格」とした。クラスター3について「日本に来る前も同じイメージだったが日本人は優しいと思う。日本人は丁寧な言葉と敬語を使うから悪い言葉があまりない。また、日本人は外国人が困っている時に優しく助けてくれる。C〈国名〉人は外国人にあまり優しくない。私の国で日本人との交流があったから日本人が優しいことは知っていた」と解釈した。

クラスター4は、『7) ちょっと厳しい生活ルール (-)』『8) 物価が高いから奨学金がないとちょっと苦しい (-)』『12) 異なる文化だから慣れるのに時間がかかる (0)』の3項目でクラスター名は「留学のハードル」とした。クラスター3について「日本人はルールに厳しいから外国人が日本で暮らすのは大変だ。例えば、敬語のルールが分かりにくいし、日本の会社も厳しい。C〈国名〉は残業があまりない。奨学金をもらえない留学生は色々な支払いや物価が高いから生活が大変だと思う」と解釈した。

クラスター間の比較においては、クラスター1と2は「色々な国の友達ができ色々な国の文化と言葉に興味を持つようになった。周りの留学生の専門が日本語だから日本語で話して仲良くしている」、クラスター1と3は「G〈施設名〉チューターは優しいからすぐ仲良くなれる」と解釈した。全体については「日本人は優しいし、仲良くなりやすい。また、日本に来たいと思うが生活費がかかるから心配だ。研究したいけどお金がないと日本に来られないから今悩んでいる」と解釈した。

3.4. 被調査者 D

図4は被調査者Dのデンドログラムである。

クラスター1は、『1) 日本語が分かると楽 (+)』『4) 旅行しやすい (+)』『10) 知らない人に話し掛けられる (+)』『12) 日本人と日本語で話してもよく英語で答える (-)』の4項目でクラスター名は「日本と言語」とした。クラスター1について「これは日本語に関することで、日本語がわかると旅行しやすくて楽なイメージだ。また、色々な人と話せるからいい。日本語で話しかけたのに英語で答える日本人がいたから『私の日本語がそんなにわかりにくいのか』と最初は不安だった。でも、私の顔が外国人だから英語で答えているんだと思うようになってだんだん慣れた。また、これは仕方がないと思っている。D〈国名〉にいた時は日本語ができると旅行が楽しめるとか色々な人と話ができるとかの考えはなかった」と解釈した。

クラスター2は、『2) H〈地名〉は勉強にいい環境 (+)』『9) 冬なのに雪が降らない (-)』『3) 物価が高い (-)』の3項目でクラスター名は「留学環境」とした。クラスター2について「F〈地域名〉は田舎で静かだから勉強にいいと思う。私の地元は寒い時は雪が多いが、F〈地域名〉は冬に雪が降らないので辛かった。寒いのに雪が降らないから気分が憂鬱になって体を壊してしまったこともある。また、物価が高いから生活するのに大変でなかなか慣れない。果物、野菜、肉とか主食の食材が高い。特に、食べ物とE〈地域名〉の交通費が高いと感じている」と解釈した。

クラスター3は、『5) 勤勉 (+)』『6) おとなしい (+)』『7) 本音と建前 (-)』『8) おもてなし



図4 被調査者Dのデンドログラム

(+)』『11) 先輩・後輩関係が厳しすぎる (0)』の5項目でクラスター名は「日本人の性格」とした。クラスター3について「日本人学生が図書館に行って勉強するのを見て勤勉だと思った。また、日本人は大人しく見えるが、その場にはいない人のことを話すときは内容が違うから本音と建前があると思った。たくさん旅行をして「おもてなし」を感じたが、郵便局、銀行などサービスもいい。先輩後輩の関係は、D〈国名〉にはそのような習慣がないからちょっと不思議に見えた。I〈大学名〉のサークルで先輩後輩の関係がすごく厳しいのを見てびっくりした。もちろん日本に来る前に先輩後輩の関係について本で読んだことがあるが、ここにきて実際に自分の目で見てやはりそうだなと思った。クラスター3は、日本に来る前にも同じイメージを持っていたが自分の目で見て確かめたという感じだ」と解釈した。

クラスター間の比較においては、クラスター1と3について「先輩後輩の関係は話し方とか日本語と関係がある」と解釈した。

全体については「日本は住みやすい国だと思う。皆が丁寧でおもてなしの態度を持っている。外国人でも日本語がわかったら暮らしやすい。例えば、先輩後輩の関係とか建前と本音の違いとか、文化の違いで大変な場合もあるが、それは人によって違うと思う」と解釈した。

4. 考察と今後の課題

ここでは以上の4名のクラスター解釈に基づき、彼らが捉えている、1) 日本留学について、2) 日本人及び日本社会について、3) 留学生と日本人との交流について、4) 東欧出身留学生の共通の対日観について、考察を行う。

4.1. 日本留学について

留学環境について、被調査者Bのクラスター2の「田舎の割には東京より交通費が高い…」、被調査者Cのクラスター4の「奨学金をもらえない留学生は色々な支払いや物価が高いから生活が大変だと思う」、被調査者Dのクラスター2の「…物価が高いから生活するのに大変でなかなか慣れない」などから日本の物価が高いと感じているようだ。物価が高い日本については、韓国人の対日観(安2009, 2010a, 2014)、中国人の対日観(安2010b)、中国少数民族の対日観(安2012)、ブルガリア人の対日観(安他2014)、インドネシア人の対日観(安2016)にも表れている。このように、

東欧出身の留学生のみならず韓国、中国、東南アジアなど多くの留学生が日本の物価が高いと感じていることがわかる。

また、被調査者Bのクラスター3の「1年間日本に住んでもまだ日本語は難しいと感じる。…大学の授業に出てもあまり外国人には関心がないように感じるし、先に話しかけてくることもあまりない」のように日本語が難しく、日本の大学生は外国人に無関心だと感じているようである。また、被調査者Cのクラスター1の「…日本に来て色々な国の人と友達ができ、日本以外の国の言語や文化にも興味を持つようになった」のように日本で知り合った留学生を通して日本以外の国にも興味を持つようになったようである。

4.2. 日本人及び日本社会について

被調査者Aのクラスター4の「一人暮らしをしても安全だし、女性が一人でスーパーとかに行っても大丈夫だ」、被調査者Dの全体の「日本は住みやすい国だと思う」から日本は安全で暮らしやすい環境であると捉えているようである。

また、被調査者Aの全体の「日本人は働きすぎるし、仕事や会社を大切にする」、被調査者Cのクラスター4の「…日本の会社も厳しい。C〈国名〉は残業があまりない」のように、日本は仕事を重視する社会であると考えているようである。仕事に厳しい日本人像については、ベトナム人の対日観（松田2013）、韓国人の対日観（安2010a, 安2008b）、中国人の対日観（安2010b）、台湾人の対日観（藤原2009）、ブルガリア人の対日観（安他2014）などでも同様の結果が得られたことから、出身地域に関わらず日本人は仕事を重視し仕事に厳しいと感じていることがわかる。

さらに、被調査者Aのクラスター1の「日本人は恥ずかしがり屋で自分の気持ちを他人に見せようとしない」と全体の「特に日本人は、他人にあまり近づかない、自分だけの生活を大切にする、他人と深く付き合わない…」、被調査者Bのクラスター3の「…大学の授業に出てもあまり外国人には関心がないように感じる…」、被調査者Cのクラスター3の「…日本人は外国人が困っている時に優しく助けてくれる」などから、日本人は消極的で外国人にあまり関心がないように感じているようだが、外国人が困った時には助けてくれると考えていることがわかる。消極的な日本人については、韓国人の対日観（安2008a, 2010a, 2015b, 2016）、ベトナム人の対日観（安2011）、ネパール人の対日観（藤原他2014）、インドネシア人の対日観（安2016）にも同様の結果が得られている。日本人の消極性については韓国人のみならず、ベトナム人、ネパール人、インドネシア人、東欧出身の留学生からも同様の結果が得られており、興味深い点であるといえる。

その他、被調査者Dのクラスター3の「…先輩後輩の関係がすごく厳しいのを見てびっくりした」という解釈から、日本社会の先輩後輩関係は特異な文化として捉えられている様子が窺える。

4.3. 留学生と日本人との交流について

被調査者Aの全体の「…他人にあまり近づかない、自分だけの生活を大切にする、他人と深く付き合わない、などの特徴がある。だから日本人と友達になるのは難しいと思う」、被調査者Bのクラスター3の「…大学の授業に出てもあまり外国人には関心がないように感じるし、先に話しかけてくることもあまりない」などから外国人との交流に消極的な日本人像を有しているが、被調査者Bのクラスター1と3の関係の「…日本人が私にもわかるような日本語で気を利かせて話してくれるから仲良くなれた…」、被調査者Cのクラスター3の「…日本人は外国人が困っている時に優しく助けてくれる」と全体の「日本人は優しいし、仲良くなりやすい…」、被調査者Dの全体の

「皆が丁寧でおもてなしの態度を持っている。外国人でも日本語がわかっただら暮らしやすい」、被調査者 A のクラスター 3 の「…アメリカ人というよりアメリカが好きみたい」のように外国人に親切で困った時には助けてくれる日本人像とアメリカ人に友好的な日本人像も持ち合わせており、外国人と日本人との交流を複雑に捉えている様子が窺える。また、被調査者 A のクラスター 1 の「日本人は恥ずかしがり屋で自分の気持ちを他人に見せようとしな。例えば、発表の時に日本の女子学生が私から離れて発表を聞きながら友達と話していた」と、被調査者 B のクラスター 3 の「…大学より大学以外の人の方が外国に関心があるように感じる。でも大学生は外国人に何を話したらいいのか分からないし、日本人はシャイな性格だから理解ができなくはない」のように、日本の大学生は外国人との交流に消極的だと感じているようである。

4.4. 東欧出身留学生の共通の対日観について

被調査者 A の全体の「日本はほかの国と違うと思う。例えば、日本人はよく謝ること、外国人に優しいことの習慣は特別に見える」、被調査者 B のクラスター 1 の「店員の丁寧なサービスが印象深いが、日本以外の国に比べた時の日本の特徴だと思う…日本に来て実際に見てちょっと驚いた」と全体の「…日本の生活に慣れるのに苦労したが…日本人や他の留学生が助けてくれた」、被調査者 C のクラスター 3 の「…日本人は外国人が困っている時に優しく助けてくれる…」、被調査者 D の全体の「…皆が丁寧でおもてなしの態度を持っている」などの解釈から被調査者全員が日本人の優しさ、日本のサービスの良さ、外国人に対する親切な態度に対して好意的に捉えている様子が窺える。このような親切な日本人像については、ブルガリア人の対日観（安他 2014）、韓国人の対日観（安 2008a, 2009, 2010a, 2015a, 2015b, 安他 2013）、台湾人の対日観（藤原 2009）、中国人の対日観（安 2010b, 安 2013）、ベトナム人の対日観（安 2011）、中国少数民族の対日観（安 2012）にも同様の結果が得られている。

以上、留学環境については、東欧の留学生は日本の物価が高く、日本語が難しく感じている様子が窺えた。また、日本の大学生は外国人に無関心だと感じている一方で、日本で知り合った色々な国からの留学生との交流を通じて日本以外の国にも興味を持つようになったようである。しかし、日本社会については、日本は安全で暮らしやすい環境であるが仕事を重視する国だと考えているようである。日本人は消極的で外国人にはあまり関心がないように見える反面、外国人が困った時には助けてくれると考えていることから複眼的に捉えている様子が窺える。日本人の消極性については、被調査者 B が「大学生は外国人に何を話したらいいのか分からないし、日本人はシャイな性格だから理解ができなくはない」と解釈しているように、必ずしもネガティブなイメージとして捉えていないことがわかる。また、1) 物価の高い日本、2) 仕事に厳しい日本人像、3) 消極的な日本人、4) 親切な日本人像などについては留学生の出身地域に関係なく同様の結果が示されていることがわかった。

今後、このような複雑な留学観がどのように変化していくのか、縦断的に捉えるとともに滞日経験の長い留学観も調査し比較検討する必要があると考えられる。また、内藤（2004）が指摘しているように、留学観には個人差も大きいいため、事例を積み重ねる必要があると考える。これを今後の課題にしたい。

付記

本論文は日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究（C）（課題番号：17K02838，研究代表者：安龍洙）の助成によるものである。

参考文献

- 安龍洙 (2016) 「インドネシア人交換留学生の日本留学に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』14, 1-18.
- 安龍洙 (2015a) 「在日永住者の対日観に関する一考察－韓国人ニューカマーの場合－」『茨城大学留学生センター紀要』13, 61-73.
- 安龍洙 (2015b) 「日本留学経験者の韓国帰国後の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』13, 1-14.
- 安龍洙 (2014) 「韓国人短期留学生の日本留学観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』12, 75-88.
- 安龍洙・宋有宰 (2013) 「外国人の対日観の変化に関する研究－日本滞在歴の長い韓国人留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』11, 81-96.
- 安龍洙・アントン・アンドレイフ (2014) 「ブルガリア人の日本留学前後の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』12, 1-14.
- 安龍洙 (2012) 「外国人の対日観に関する研究－中国の少数民族出身者の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』10, 1-14.
- 安龍洙 (2011) 「外国人の対日観に関する研究－ベトナム人留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』9, 1-18.
- 安龍洙 (2010a) 「外国人の対日観に関する研究－日本滞在歴の長い韓国人の場合－」『ユーラシア研究』7 (4), 373-392.
- 安龍洙 (2010b) 「外国人の対日観に関する研究－中国人非正規留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』8, 1-17.
- 安龍洙 (2009) 「外国人の対日観に関する事例研究－韓国人短期留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』7, 1-13.
- 安龍洙・アントン・アンドレイフ (2014) 「ブルガリア人の日本留学前後の対日観の変化に関する一考察」『茨城大学留学生センター紀要』12, 1-14.
- 安龍洙 (2008a) 「韓国人留学生の対日観の変容に関する一考察－個人別態度構造分析法 (PAC 分析法) を用いて－」『留学生交流・指導研究』10, 31-48.
- 安龍洙 (2008b) 「韓国人の対日観に関する一考察－個人別態度構造分析法 (PAC) を用いて－」『ユーラシア研究』5 (3), 107-125.
- 池田庸子 (2015) 「短期英語研修参加者の海外留学に対するイメージ及び意識の変化」『茨城大学留学生センター紀要』13, 47-60.
- 池田庸子 (2014) 「外留学に対するイメージ及び意識の変化－韓国語学研修参加者の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』12, 15-28.
- 奥村圭子 (2016) 「交換留学の意義の変容と異文化適応のプロセス－在日留学生のケース分析から－」『高等教育と国際化山梨大学教育国際化推進機構紀要年報』2, 19-36.
- 内藤哲雄 (2004) 「留学生の孤独感の個人別構造分析平成13年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書 (課題番号 13610124)」
- 藤原智栄美 (2009) 「台湾人日本語話者の対日観に関する一考察－個人別態度構造分析法 (PAC 分析) による事例研究－」『日本学と台湾学』8, 1-23. (台湾・静宜大学)
- 藤原智栄美・杉浦秀行 (2014) 「理工系大学院留学生は留学生生活をいかに捉えるか：PAC 分析による事例研究」『留学生交流・指導研究』16, 7-20.
- 松田勇一 (2013) 「外国人の対日観の変容に関する研究－ベトナム人留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』11, 97-111.
- Naito, Testuo (2014) Idiographic Cluster Analyses of Image of Japan before and after Living in Developing Countries as a Japanese-language Teacher. *ICAP2014 (28th International Congress of Applied Psychology)*. Palais des Congres in Paris Convention Centre (2014年7月11日, 口頭発表資料)